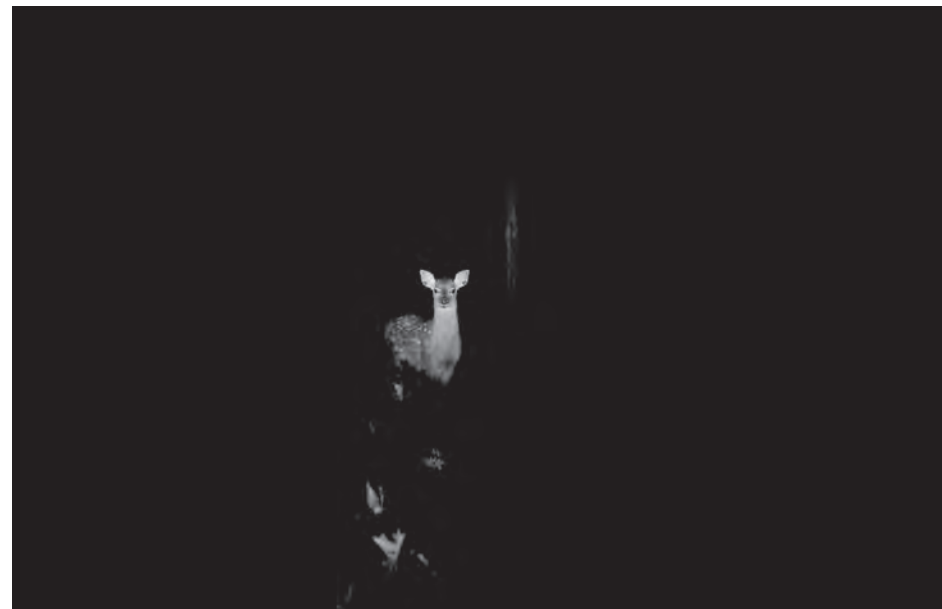


田附 勝さん 写真集『KURAGARI』(SUPER BOOKS)

見えない何かに出会う時



kuragari no.35 2012 June

©Masaru Tatsuki (以下写真作品すべて)

処女作『DECOTORA』から一貫して、人の暮らしの営みを、土地や風土とのかかわりを通してフィルムに刻み続けてきた田附勝さん。最新作『KURAGARI』は、獣と猟師が生きてきた山の世界の闇に浮かんだ鹿の姿を映し出した写真集である。

インタビュー構成・大西夏奈子

「暗がり」との出会い

——昨年八月、六本木のギャラリーSIDE2で開かれたフォトエキシビジョンはユニークでした。暗闇の順路も示されていないギャラリーの中をそろそろと歩いて、一枚一枚の写真に出会う。意表をつかれました。

ありがとうございます。ライティングもいろいろと試したんだけど、結局、開放した入り口から奥の暗がりへ入っていくというふうになりました。東京の六本木に二点ぞういう空間を作るといった試みは、僕にとつての

挑戦でもありました。いまはインターネットを通じて簡単に膨大な数の写真を見ることができるよう。けれども、写真の強さや影響力にはもつと別の、力強いものがある。だから見に来てほしいという思いもありました。

SIDE2は現代アートのギャラリーなので、写真のお客さんはあまりいないと説明を受けましたが、それも惹かれた点でした。『KURAGARI』を展示するなら、東京からだと思いましたが、フラットに見ても見える場所がよかったです。ホワイトキューブの写真ギャラリーで発表していくことも

大事だけれど、別の方法があってもいいと思っていました。

『KURAGARI』の撮影時期は二〇〇九年から一二年です。岩手県の釜石

市で暮らす友人に僕はお世話になっていますが、「夜、鹿を見たことがあるか？」とある晩突然尋ねられたのがきっかけです。「ないのか、なら行こう」と、一緒に車で山へ行った。ところが全然現れません。車を山道に止め、電気も消してしばらく車内にいました。

助手席にいた僕が、なんの気なしに気配を感じて懐中電灯を照らしたら、鹿たちが向こうから見つめていました。僕たちがライトを照らして鹿を見ているというより、鹿たちと闇という存在から、こちらが見られていたという感覚です。闇全体が覆いかぶさるように迫ってきて、これはちゃんと撮らなきゃダメだ、と思ったのが最初でした。僕たちはライトを持って山に入る側ですが、そうではない「向こう側」という提示の仕方をしたかった。だからタイトル

は「暗がり」という表現を選びました。こちらと向こうはつながっているという意味でも、「暗闇」ではないな、と思いました。

夜の山奥でなぜ鹿がいるとわかるのか、とよく聞かれます。僕は猟師たちから獣道の知識を教えてもらい、彼らの邪魔にならないように必死で猟についていきました。そうやって何度も山に通っていると、鹿が現れそうな時や天候、場所といったものがわかってくる。その気配を感じたらカメラを構えてライトを照らします。

実際にはLED懐中電灯を左手に、右手にライカを構えて撮っています。ライカという面倒なカメラを使う理由は、鹿そのものを撮るのが目的じゃないから。デジタルカメラで撮れば、全く別の写真が撮れたでしょう。でも僕はそこに立ち会った記憶



たつき・まさる ●1974年富山県生まれ。98年よりフリーランスとして活動始める。